

# 後援会だより

第25号

2018年3月15日発行

編集発行／鹿児島大学法文学部後援会

## 本誌の案内

○ごあいさつ	
後援会会長・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
法文学部長（後援会顧問）・・・・・・・・	2
○専門職大学院報告	
臨床心理学研究科・・・・・・・・・・・・・・・・	2
○就職支援事業	
平成29年度就職支援室活動報告・・・・・・・・	3
就職活動にかかる交通費の一部支援事・・	4
○主な支援事業の成果報告・・・・・・・・	5
留学支援金支援・・・・・・・・・・・・・・・・	5
各種実習への支援・・・・・・・・・・・・・・・・	7
○保護者の皆様からのメッセージ・・	9
○平成29年度後援会役員一覧・・・・・・・・	10

## 後援会会長ごあいさつ

法文学部後援会会長 堂路 温幸



会員の皆様におかれましては、後援会の運営にご理解とご協力をいただき、厚く御礼申し上げますとともに、謹んで新春のお慶びを申し上げます。

本年は、「平成」30年目の節目の年です。昨年末に

は、天皇陛下が31年4月30日にご退位されることになりました。これからご退位までの1年数か月が、「内外、天地ともに平和が成る」という願いが込められた「平成」の元号に相応しく、平和で平穏な日々となるようにと願っているところです。

2017年を振り返りますと、アメリカではトランプ大統領が就任し、TPP及びパリ協定からの離脱を表明するなど「アメリカ・ファースト」の追求が続き、世界に波紋が広がりました。また、北朝鮮から発射されるミサイルの脅威に、国民の安全が幾度となく脅かされ、各国においてテロと思われる爆発や銃撃事件も数多くあったように思います。このような世界情勢の変動に、日本も少なからず影響を受けることは必至で、いびつな経済成長がもたらす格差社会の拡大によって、教育を受ける子どもたち・学生への影響が心配されるところです。

国内に目を向けますと、選挙年齢を18歳以上に

引き下げてから初めての衆議員議員総選挙が行われ、本学学生の皆さんも種々の取り組みに参加されていました。また若い世代の活躍も多く、歴代単独一位となる29連勝を達成した最年少棋士藤井総太プロの活躍や、陸上100mの桐生祥秀選手が日本人選手としては史上初の9秒台を記録するなど、明るいニュースに元気をもった年でもありました。

さて、2018年は、明治維新から150年という歴史的な節目の年でもあります。

日本が近代国家への扉を開いた明治維新においては、西郷隆盛をはじめとする鹿児島（薩摩藩）の若者たちの燃ゆる思いと行動力が、その大きな原動力となりました。

本年は、大河ドラマ「西郷どん」の放送もあり、その中で描かれる西郷隆盛の生涯や当時の鹿児島の姿を、私自身も楽しんでいるところです。

鹿児島大学には教育・研究施設はもちろんのこと、スポーツ活動や各種サークル、ボランティア組織など、知識を蓄え、知力を磨き、「人間力」を鍛えるさまざまな環境が備えられています。

「鹿児島」への注目・関心が高まり、「熱い」この年に、学生の皆さんが、学び舎のある「鹿児島」に対する誇りや愛着の心を醸成するとともに、「西郷どん」のような「想像力・判断力・行動力」を磨いてのさらなる奮起を期待したいものです。

私たち後援会におきましても、学生の皆さんが地域や社会のリーダーとして活躍できる人材へと成長できるよう、後方から「心熱く」サポートしていきたいと考えておりますので、引き続き後援

会へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、この春、鹿児島大学を卒業される皆様、鹿児島大学に入学される皆様及び保護者の皆様に心からのお祝いを申し上げますとともに、会員の皆様とご家族のご健勝、ご多幸を心よりご祈念申し上げます。

## 法文学部長ごあいさつ

法文学部長（後援会顧問） 高津 孝

### 海外で働く女性たち

先日、ハワイ大学マノア校のハミルトン図書館に調査に行きました。ハワイ大学は、世界的に有名な琉球古典籍コレクションであるフランク・ホーレー文庫を所有しており、その調査に行ったのです。ハワイ大学では3人の日本女性司書にお会いしました。今回の調査に協力いただいた方は、ハワイに行く前のメールのやりとりで日本語の上手な日系の方とと思っていましたが、お会いして話を聞くと日本で生まれ育ち、日本の大学を出た後、アメリカに渡り、アメリカの大学を卒業後、ハワイ大学に就職されたとのことでした。ご紹介いただいた他の二人の日本人女性司書も同じような経緯で司書になられたとのことでした。欧米では司書の社会的地位は極めて高く、優れた司書は大学教員にも勝る評価を受けます。彼女たちもアメリカ社会での厳しい競争を勝ち抜いて大学図書館司書の地位を獲得された方々で極めて優秀です。日本女性の社会進出、世界展開という点で、あらためて国際化について考えさせられました。日本で就職しても、何らかのきっかけで外国で働くことになることは現在では珍しいことではありません。その意味で、学生時代にしっかりした語学力を身につけておくことは是非学生たちに考えていただきたいポイントです。特に、外国語習得は20代がピークで、30歳をすぎるとその習得が極めて困難になります。語学を教えていると、20代と30代以降の差は歴然たるものであることがよく分かります。学生時代に様々な外国語に触れておくことこそが将来への投資になると言えるのです。いま、大学は様々な工夫をして、学生たちに語学力向上の場を提



供しています。大学を利用して、どんどん自分への投資をしてくれることを願っています。

## 専門職大学院報告

### ◎臨床心理学研究科

鹿児島大学大学院

臨床心理学研究科研究科長 中原 睦美

後援会の皆様には、平成19年度の臨床心理学研究科研究科設置以来、多大なご支援をいただき厚く御礼申し上げます。昨年度、文部科学大臣により認証された認証評価機関「公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会」による2回目の認証評価にて臨床心理分野専門職学位課程として「適合」の判定を受け平成34年3月31日まで認証されました。今回、3回目受審に向けた平成29年度分の活動報告をいたします。



### 1. 国家資格「公認心理師」への対応について

公認心理師法が、平成29年9月15日に施行されました。この間、臨床心理士と公認心理師の相補の観点から、臨床心理分野専門職大学院として各種臨床心理士団体及び臨床心理分野専門職協議会等を通して交渉して参りました。本研究科では、臨床心理士養成を軸に公認心理師の受験資格に対応すべくカリキュラムを見直し、本年度後期から在籍生に対する経過措置への対応を図りました。さらに、全国に先駆け、本研究科の修了生及び前身の人文社会科学研究科臨床心理学専攻（独立専攻）の修了生にも現任者講習及び特例措置への対応情報を研究科HPにて発信（10月1日付）し、修了生や他大学からも感謝の声をいただきました。これに先立ち、HPをより見やすいように全面改訂しました。パソコンやスマートフォンから閲覧可能ですので、是非、ご覧ください。

<http://cp.leh.kagoshima-u.ac.jp/>

### 2. その他の活動

今年度は、毎月のFD会議に加え、文科省高等局専門職大学院室の岡陽介係長をお招きしたアドバイザリーボード研修会、靱井和朗農学研究科長、越塩俊介水産学系長をお招きし、法文学部心理

コース若手教員と合同の「科研費講習会」を開催しました。また、10月1日付で教育領域の心理臨床専門の大石英史先生が教授として着任し、従来の9名体制に戻りました。本研究科は、外来相談をティーチング・クリニックである附設心理臨床相談室にて外来相談を年間1,300件前後受け付け、ここでの実習を臨床心理教育の中核としています。今年度の臨床心理士試験も過年度生を含め13名が合格し、臨床心理士試験合格率は全修了生の96%を維持しています。これは、学生・教員の努力の賜であり、後援会からのご支援にも依っております。引き続きご支援のほどよろしくお願い申し上げます。今後も高度専門職業人である臨床心理士養成を主眼に、理論と実務を架橋した教育及び臨床研究を継続し、地域社会に貢献できる質の高い心理職の養成を目指して邁進していく所存です。

## 就職支援室より

### ◎平成29年度就職支援室活動報告

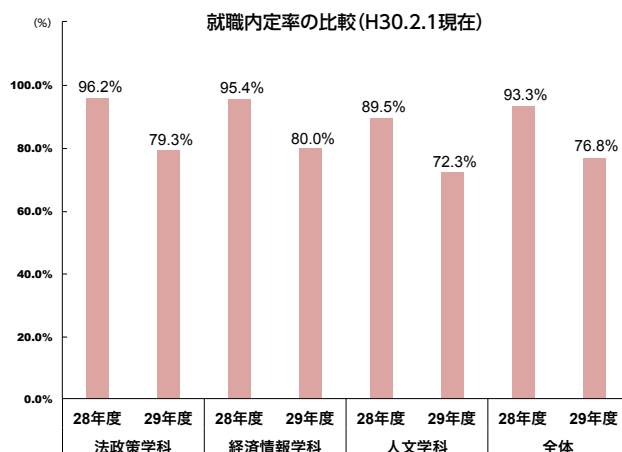
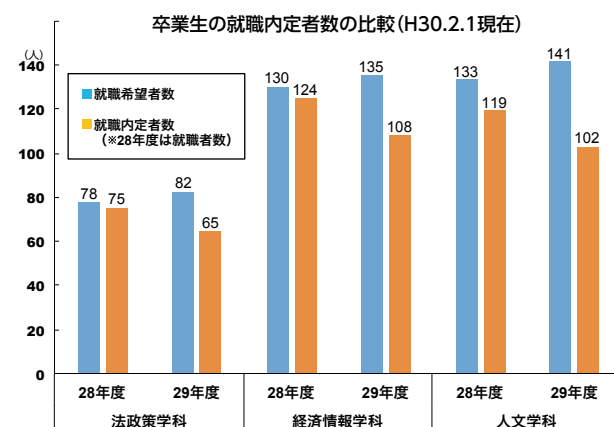
就職支援室長 藤田 紘一

29年度の就職環境は、昨年に引き続き学生優位の「売り手市場」が持続しており、特に生産活動が好調な電機など、製造業を中心に人手不足感が強まり、安定した雇用状況が続きました。このような環境下で、就職活動を続けた現4年生の12月1日時点の就職内定率は86.0%で、前年同期に比べ4.3ポイント上回ることができました。しかし一方では、14.0%の就活生が未だ内定を得られず、現在も就職活動中という残念な状況が生じていることも事実です。今回は、内定率に大きく影響する「企業選定」について考えてみたいと思います。

2018年3月卒業予定の今の就活生に対する民間企業の求人倍率（大卒求人倍率）は、推定で1.78倍となり、前年より0.04ポイント高くなったと、リクルートホールディングスが発表しました。これは、みなさん一人ひとりが座る椅子は二つ近くあるということで、学生優位の「売り手市場」が続いているということです。単純に考えれば、全員が座れてかなり椅子が余ることになります。リーマンショック後の「超氷河期」には1.2台だったことを考えると、みなさんは基本的には恵まれた環境にありますが、どうしてこのようなことが起こるので

しょうか。この大きな要因は、「売り手市場」が続き、大企業に入りたいと思う学生が急増したことです。いわゆる「大手志向」が強まったわけですが、でも現実には厳しく、3人に1人強（求人倍率0.39倍）しか希望はかなわず、大手企業は年々「買い手市場」になっているのです。大企業でも業種による求人倍率の差を見てみますと、人手不足が深刻な業界で大きく上昇し、建設業・流通業は10倍の「超売り手市場」ですが、金融・サービス・情報業は0.2倍の「買い手市場」ということも参考にしなければなりません。

さあ、この結果を受けて、みなさんはどう行動しますか？人気の大企業しかエントリーしていない人は6月になって慌てないように、中堅・中小企業にも視野を広げることをおすすめします。自分に合った優れた中小企業の見つけ方は、「就活ニューズペーパー by 朝日新聞」の2017年4月14日の記事『君を欲しい中小企業たくさん！キラリと光る企業の見つけ方』をご覧ください。業種についても選択肢を広げると可能性も大きくなると思います。特に3年生は以上の点を念頭に置き、就職活動に一生懸命取り組んでいただきたいと思います。



## ◎就職活動に係る交通費の一部支援事業

法文学部後援会では、学生が就職活動中に支出した交通費の一部を補助する事業を行っています。少しでも学生の負担を軽減できればと願っています。ここでは、この支援事業を利用して就職活動を行った学生からの報告を掲載しました。学生たちの就職活動の現状を知る参考にしていただければ幸いです。

### ◆交通費支援を受けて

法政策学科4年 佐々木 仁美

私は、3年生の6月頃から企業説明会に参加したり、インターンシップに参加したりしていましたが、就職活動に本腰を入れて動き始めたのは3年生の3月からでした。

関東圏での就職を考えていたため、合同企業説明会は東京開催のものに参加しました。合同企業説明会に参加して、自分が興味をもった企業を4社ピックアップして、その企業の個別説明会に参加するために、3月から4月にかけて2ヶ月間のスケジュールをたてました。

4社だけとはいえ、日程を出来るだけ固めようとしても、なかなかそう都合よくはいきません。結果的に、3月だけでも、鹿児島ー東京間を3往復しました。

東京には鹿児島大学が設置している宿泊施設があったため、1泊1,500円で宿泊出来ましたが、交通費には少々頭を悩ませていました。

そのような状況下において、後援会が実施していた交通費の一部支援は有難いものでした。後援会に加入している学生であれば、鹿児島県外への就職活動において、1人1回最大5000円の支給を受けられるという内容だったため、少しでも交通費を支援して頂けるならばこんなに助かることはない、と思い、私は3月のうちに支援を願い出しました。

3年生の3月から始めた本格的な就職活動は、4年生の5月半ばに第一志望の企業から内々定を頂くことで、終わることが出来ました。

後援会の皆さんのお心遣いによる支援を受ける際、「鹿児島大学の学生」として就職活動に臨まなければいけない、とピンと背筋が伸びるのを感じました。緊張感を最後まで保つことが出来たのは、後援会の皆様のお陰だと私は思っています。

金銭的援助とともに、精神的後押しを受けたこと、書面上ではありますが、この場を借りて深く御礼申し上げます。本当に有難う御座いました。

### ◆交通費支援を受けて

法政策学科4年 永野 啓太

私の就職活動は大学3年生の4月から開始しました。私は公務員を第一希望に考えていたため、大学とは別に公務員予備校に通って筆記試験対策の勉強に取り組んでいました。また、就職活動を公務員試験一本に絞ってしまうことへの不安から、民間企業の就職活動も頭の片隅に置いていました。

そして、大学4年生の4月ごろ公務員試験勉強に取り組んでいた時に、私の地元他県で開かれる民間企業の合同説明会にも参加したいと思いました。しかし、私は公務員予備校にも高額な金額を払って通っていたため、鹿児島県で公務員予備校に通いつつ、民間企業の就職活動のため地元他県に行き来するととなると、時間的にも金銭的にも余裕がありませんでした。また、迫り来る公務員第一次試験まで残り期間が短かったため、精神的にもかなり追い込まれていました。

そんな中、私は後援会による交通費一部支援の存在を学部掲示板で知りました。後援会に加入している学生に対し、鹿児島県外への就職活動（企業説明会や採用面接等）の際に1人1回、最大5,000円を支給されるという内容のものでした。非常に有り難い制度だと思い、支援を受けさせていただこうと思いました。

援助をいただいた結果、地元の民間企業の説明会に参加でき、就職活動の選択肢の幅が広がり、落ち着いて就職活動を進めることができました。後援会の皆様には感謝しております。ありがとうございました。

## 主な支援事業の成果報告

### ◎留学支援事業

法文学部後援会では、会員の皆さまからお預かりした会費を、学生が国内外で行う調査実習の旅費や、教育・研究活動の経費の補助に活用しています。ここでは、その一部を成果報告としてご紹介します。

### ◆アメリカ合衆国ジョージア州 ジョージア大学

人文学科4年 久保 花実

私は鹿児島大学協定校派遣制度により、アメリカのジョージア州、ジョージア大学にて2016年8月から翌年の5月まで約9か月間留学する機会をいただいた。始めのうちは授業についていくので精一杯だったのに加え、予習に必要な膨大な量のリーディングや課題として頻繁に出されるレポート等、乗り越えなければならない壁はいくつも立ちちはだかった。しかし、一つ一つ自分の力で困難を乗り越えてゆくに連れ、「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ」ことの楽しさを実感するようになり、さらに自分の専門知識を新たな側面から見直し、広げることが出来た。

1週間の春休みの間、大学の学生が運営する社会貢献型体験学習旅行（UGA IMPACT trip）に参加したことは、この9か月にわたる留学生活の中でも一番と言っていいほど自分自身を見つめ直すいい機会になった。私は移民農業労働者の人間としての権利に焦点を当て、理解を深めることが目的のプログラムに参加することになり、フロリダ州の Immokalee という地域に一週間滞在することになった。滞在中は移民農業従事者、その家族・子供が暮らしている環境を目の当たりにすることで、移民政策に関する理解を深めただけでなく、彼らにとって必要なコミュニティサービスの現状を知り、彼らの労働条件や待遇向上のために奮闘する団体の取り組みについて学ぶことが出来た。また、毎晩行われるリフレクションでは自分が感じたことを他の学生と共有し、意見交換を行う貴重な体験も得た。私は正直、この IMPACT trip に参加するまでは、母国を離れて農業従事者として働かざるを得ない人々のこと、マイノリティ、移民政策、そして人間としての権利とは何かと真剣

に考えたことはなかった。物事を捉える際に自分が置かれている状況が基準になっていて、不平等だと感じていてもその声が反映されない人々に寄り添ったりすることの大切さを忘れてしまっていた自分に気づかされた。

「移民労働者」に焦点を当てた IMPACT trip に参加できたこと、大学の授業でも移民は切っても切り離せない重要な話題であること、そしてトランプ大統領の誕生という変革の時期にアメリカに滞在していたこと—これらは、メディアを通してではなく、実際に私の自分の目で見て、耳で聞き、体験してきた貴重な財産であり、留学生活の成果だと言えるのではないだろうか。

これらの体験を通して、私がこれから探究していきたいと思える新たなキーワードが見つかった。移民と多文化主義社会だ。日本の英語教育の中にもアメリカの移民社会を反映した多文化教育は取り入れられないだろうか、それこそが真の多文化理解やグローバル人材の育成につながるのではないか。今後も鹿児島大学で引き続き学業に励むなかで、自分なりの答えを導き出せるように尽力してゆきたい。

### ◆カリフォルニア州立大学 モントレイでの留学

人文学科3年 武市 智暉



カリフォルニア州立大学モントレイにて、約2か月の語学研修、サマーセッションを経て、通常の授業を1学期受講しました。この留学の目的としては、英語力の向上と専攻の授業を受けることでした。英語に関して、渡航前よりはいくらか上達したのではないかと思います、満足いくレベルには達していない状況です。

留学生ということで、上級のクラスを受講するこ

とはできませんでしたが、それでも、日本の大学では経験できないような講義内容に触れられ、経験値が増えたと感じます。自分が受けた授業は、すべて生徒と教授または生徒同士による対話形式で、ついていくのがとても大変でした。また、課題の多さにも圧倒されました。特に、サマーセッションは、普段16週間かけて行う授業を4週間で行うので、生徒に課されるリーディングの量が多かったです。ただ、課題に追われて「やらされている感」が否めないで、自分が行うことに明確なビジョンを持って自分自身で何か大きなプロジェクトに取り組みたい人には、かなり負担になる授業形態だと感じました。

滞在形態に関して、語学研修、サマーセッションまではホームステイで、秋学期は寮を利用しました。ホストファミリーの人は皆親切で、困ったことがあったら助けてくれました。一緒にテレビや映画を観たり、ドライブに連れて行ってくれたりしました。寮では5人の共同スイートルームで、メンバーとは特に問題なく過ごせました。自分の部屋には一人ルームメイトが居ましたが、1か月だけの滞在だったので、残りは一人部屋の状態でした。

この留学を通して、多種多様な考え方の人たちに出会い、自分はまだまだ未熟で将来のビジョンが弱いと感じる部分が多く、自分を鼓舞する刺激をたくさん受けました。また、アメリカで働きたいという気持ちが以前にも増して、強まりました。

## ◆韓国 釜山大学

人文学科3年 中野 伶菜

平成29年3月から韓国の釜山大学へ、約一年間の交換留学が始まった。釜山大学には大学一年の時に参加したプログラムの時にできた友達もいたため心強かったが、初めての留学ということで不安と期待がたくさんあった。

前期は韓国語と文化、環境に慣れるため、特に難しい授業は取らなかった。学校生活としては留学生の授業を主に受講した。韓国語を歌や映像、会話の中から学ぶ授業をとって見たが、様々な視点から韓国語を学ぶことができ楽しかった。留学生の授業であったため、日本人以外の外国人ともたくさん知り合うことができた。外国の友達との韓国語での会話を通じ、自分の韓国語にも自信がついた。韓国人と会話をするより気を遣わずにお互いの話したい

ことを話すことができたし、韓国以外の国の文化や言語にも触れることができたので良かった。

夏休みには、前期に語学力を試すために一度韓国語検定を受けた。留学に来てから三か月ほどだったので自信はなかったが、最高級の一つ下の級をとることができた。韓国語能力試験を終え、6月の後半には韓国国内の旅行に行った。日本人で釜山大学の正規生であるお姉さんとの旅行であり、事前に計画を立てずにリュック一つでの旅行であったが、とてもいい経験となった。前期の間は釜山から一歩も外に出ていなかったが、釜山以外の都市に足を運び、現地の名産を食べたり、市場に行ったり、観光地を回るとは楽しかったし、私が今まで知らなかった韓国を深く学ぶことができたと思う。8月の終わりには、一人でソウルを旅してみた。ソウルは、大都市でありながら水や緑がきれいに保たれており、歴史や芸術に触れることのできる場所が多くて、とても魅力的な都市であることを感じた。



後期には、韓国人の学生と同じ授業を聴講した。前期の授業は留学生の授業を主に取っていたため良い点もあったが、韓国人とかかわる機会が全くと言っていいほどなく、新しい友達と出会うことができなかった。そのため後期には、韓国人と同じ授業に出て、発表やチーム課題を通じ新しい友達と出会うこともできたし、韓国人学生たちの発表能力の高さに驚いた。パワーポイントの完成度が日本の学生に比べて高いことを感じた。私も今後日本で発表するときには、発表を見ている人が楽しく、わかりやすいようなパワーポイント作成を心がけたいと思った。日韓の歴史を学ぶ授業をとって見たが、韓国側から見た日本を知ることができた。日本語の授業も受けてみたのだが、韓国人の学生たちの日本語能力の高さに驚いた。また、学ぶ意欲を持った学生たちが多かったことにも驚いた。日本語の難しさを感じたし、日本語を習得しようとしている韓国人が多い現状を知り、私ももっと韓国語を頑張ろ

うと思えた。

留学後期の11月にもう一度韓国語能力試験を受けたが、6月に受けた頃より韓国語能力が伸びていることが実感できたので、自信があったし、留学の一番大きな目標であった韓国語能力試験6級を達成することができたことは、本当に嬉しかった。

留学で得たことは、今後の生活にも大いに役立つ、私の進路にもかかわるだろうと思う。



## ◎各種実習への支援（国内）

### ◆合同ゼミを通しての成長

経済情報学科3年 石本 衛



今回7月1日・2日にかけて島根県立大学に行き「合同ゼミ」をさせていただきました。「合同ゼミ」

とは、地域経済や環境問題に関するテーマを1つ決め、そのテーマについての意見をディベート方式・政策提言方式で討論するものです。合同ゼミを他大学と行うことは、意見交換ができることに伴う視野の広がりや、初めて会う人の前で発表することでプレゼンテーション能力の向上を目的としています。そのような目的のもと今回行かせていただき、実際に目的を達成できたのではないかと手ごたえを感じています。また合同ゼミの後には親睦会を開かせていただきました。親睦会では新たな友人が出来るとともに、普段から取り組んでいることや考えていることをお互いに話し、刺激をもらいました。また実際に島根県に住んでいるため「生」の島根県の実情を知ることができ、「これからの鹿児島県・地方が発展していくために、どのようなことに取り組むべきなのか」という大きな問題に対するヒントをもらいました。今後のゼミ活動や卒業論文に活かしていきたいと考えています。

また、合同ゼミのためにゼミ生は約1か月間勉強に励みました。時には進行状況が思わしくなかったりしたこともありましたが、互いに意見を出し合うことで問題を解決し、よりよいものを作ることができました。私は、グループで1つの目標に向かって取り組むことは、絆を深めることや人間として成長することができるものだと思います。しかし、大学になると高校までと比べてそのような機会が減っていると私は感じています。今回の合同ゼミでは、その機会をいただけたこと感謝しています。私は現在3年生なので、あと1年半で卒業することになりますが、今回の合同ゼミで学んだことを忘れず今後の学生生活でも人間としての成長に努めていきたいです。そして社会に出ても今回の経験を糧に人生を歩んでいきたいです。

### ◆東京合宿から得た学び

経済情報学科2年 瀬戸山 彩奈

私たちは、9月25日～27日の間に2泊3日の東京合宿を行った。ゼミ合宿では、飛行機などの交通手段からホテルまでいかに安く最高の物にするかにこだわっており、ゼミ合宿自体が初めての経験である私にとっては、全く初めての経験であり、驚かされるばかりであった。

合宿1日目、2日目に訪れた東京ディズニーランド・シーでは、高水準の顧客満足度を維持し続ける

秘密は何だろうか、また私たちのプロジェクトに活用できることはないか、といった問題意識を持って、キャストさんのゲストに対する対応を注意深く観察した。キャストの皆さんの動きは、実際に近くで見ても完璧であった。日本人でも外国人でも関係なく、困っている人がいたら歩み寄り、全力で耳を傾け精一杯の対応をする。ゴミが落ちていたら拾い、体調の悪いゲストを見つけると介抱する。ディズニーで働いているキャストは、全員が当たり前のことを当たり前に行っていた。当たり前のことを全員が当たり前として行うのはそう簡単なことではない。そこに高水準の顧客満足度を維持し続けている理由があるのではないかと思った。また、このことは、私たちのプロジェクトにも通じることであると感じ、こうありたいと思った。

合宿3日目には、都市再生プロジェクトの一環であるスーパーエコタウン事業の見学として、3企業の廃棄物処理・リサイクル施設を見学した。今回見学した企業では、今現在問題になっている、環境問題に対しての解決策に取り組んでおり、その方法は驚くべき物ばかりであった。今回このような企業を見学し、私自身まだまだ知らなかった分野であったため、自分自身の勉強不足を痛感し、環境学を学ぶ大前ゼミの学生として、勉強しなければならないと思った。

今回の東京合宿では、普段の生活では得られないような学びを多く学ぶことができた。今回学んだことを私たちのプロジェクトに活かし、今後の活動に活かしていこうと思う。この合宿では、充実した3日間を送ることができた。



## ◆人文学科フィールド学実習（地理学） 「北海道巡検」

人文学科3年 永井 桃香



2017年9月24日から29日の5日間、私たちは地理学の野外実習のため、北海道を訪れました。ここでは、今回の調査内容についてご報告させていただきます。

帯広市では、帯広市内を一望できる県庁の展望台を訪れ、十勝平野の成立について学びました。また、その後、大規模農業の基盤としての役割を担うJAひのを訪れ、帯広市で現在行われている農業の成り立ちや現状について聞き取り調査を行いました。ここでは、江戸時代以降、人々が本州から北海道へ移住し、徐々に町が成り立っていく過程を知ることができました。

さらに、帯広市内では、観光・商業・農業の三つのテーマのもと、班別調査を行いました。観光班は、土地利用の変遷と観光事業との関連性を明らかにすることを目的とし、十勝川温泉を調査しました。その結果、観光客の温泉街における周遊性を高めるための都市再生整備事業によって、土地利用の変化がみられることを明らかにしました。

商業班では、帯広市内の広小路商店街を対象に、中心市街地の再開発が街の商業機能にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とし調査を行いました。そして、再開発事業による影響はあまり見られず、買い物をする商店街から、飲食を行う商店街へと性格を変化させていることを示しました。

農業班では、日本随一の大規模農業を行う帯広市音更町を対象に調査を行い、大規模農業経営が行われるまでの経緯や農家経営の変化を明らかにしました。

夕張市では、商工会議所にて聞き取り調査を行ったのち、夕張市の旧炭鉱跡やコンパクトシティの



建設予定地などを案内していただきました。2007年に財政再建団体に指定されたのち、コンパクトシティの実現に向けた行政や商工会議所の努力を知ることができました。

札幌市では、まちなか巡検として市内の観光スポットや、歴史的建造物を巡りました。ここでは、自然的事象と人文的事象の関連性について学び、地理学の奥深さを身を以て感じることができました。

このように、後援会からのご支援のもと、私たちは普段目にするのできない北海道の事象に触れることができ、地理学の面白さを改めて実感することができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

## ◆日本臨床動作学会に参加して

臨床心理学研究科1年 山ノ川 純

私たちは、平成29年10月21・22日、福岡県福岡市で開催された日本臨床動作学会の第32回学会主催研修会に参加させていただきました。

今回の研修会は臨床動作法に関する講演といった座学だけでなく、実際に自分たちで動作法を体験したり、動作法の第一人者である成瀬悟策先生から支援の方法を直接ご指導していただいたり、とても実践的な内容で充実していました。また、発達障害児に対する支援の在り方を考えるプログラムでは、参加者が提供した事例を十分に検討した後、実際に支援に使えるような動作法を体験するという流れで進み、現場に即した技術を学ばせていただきました。

動作法は身体の微妙な変化に向き合わなければならないため、文献を使って学ぶだけでなく、実際に体験して感じる感覚を大切にすることが重要であると私は考えています。そのため、今回の研修会のようにたくさんの先生方から直接指導していただく機会は非常に貴重で、とても学びの多い時間となりました。また、研修を通して今までの自分自身の支援の在り方を振り返る中で、これからの自身の活動方針を改めて考えさせられました。クライアントさんのためになるようにどこまでも考え続ける先生方の姿勢を忘れず、これからも精進していきたいです。

私たちは現在、障害のある方に対して臨床動作法を行っています。今回の研修会で学んだ技術や姿勢・態度を活かし、クライアントさんのためになる支援を行っていきたいと思います。

## 保護者の皆様からのメッセージ

保護者の皆様からいただいたお便りの一部をご紹介します。

### ◎人文学科 保護者

娘が鹿児島大学を初めて訪れたのは平成28年のオープンキャンパスでした。親子で参加し、法文学部の先輩とお話する機会がありました。卒論に関する取り組みを熱く語った姿がとても印象に残りました。

次にお話した学生さんから大学生活の話を伺ったのですが、受講している内容を見て大学は本人が希望すれば学びたい事が多く学べる所だと改めて感じ好印象を受けて帰宅しました。

そして8か月後、晴れて入学しました。現在、高校時代から続けている文化系のサークルに所属しています。その関係で企業を訪問する機会があり、厳しい言葉を掛けられ戸惑ったり、慣れないヒールの靴で遠方まで訪問し疲れ果てたり一つ一つが社会勉強だと思い愚痴を聞き励ましています。

私が子育て支援施設で働いている事もあり娘が受講している障害児教育の授業の話や多くの共通の話題で盛り上がるのも貴重な時間となっています。

先日、参加した懇親会で保護者の方々とお話しする中で抱えている不安や悩みに共通する事もあり大変励まされました。また高津学部長が懇親会挨拶の中で「何かあればいつでも相談して下さい」と温かく声を掛けて下さり安心できました。

これからゼミの選択や就職など人生の大きな岐路に立つ事となります。学友や先輩、先生方との出会いを大切に少しずつ成長してくれることを願っています。

### ◎人文学科 保護者

娘が大学に入学して早いもので2年が過ぎました。希望したコースに入ることができ、レポートに没頭する娘を少々頼もしく思います。レポート提出も履修登録もインターネットの時代なのだと当たり前前に驚き、30年前、取りたい先生の講座の履修届を提出するために走り回り、膨大な量の卒業論文を手書きで書いていた自分の大学生活を思い出します。

今回法文学部の理事というお仕事をさせていた

だき、本来ならばなかなかお話をお伺いすることのできない学部長の高津先生をはじめ、たくさんの先生方のお話を聞かせていただき、娘の大学生活を垣間見ることができました。本当に良い経験をさせていただいていると感じております。

先日、高校を卒業し就職した甥が「僕も大学に行きたかったなあ」と呟いたとき、当たり前のように大学に通い、当たり前のように部活・バイトと過ごす我が子に一言言いたいと思いました。「今過ごす生活は、多くの人たちの応援や助けがあるからこそできている。感謝の気持ちを忘れないで！」

私たち親はずっといつまでも見守っています。自分で選び自分の意志で学べる素晴らしい時期を、ぜひ数年後に大学生活が輝いていたなと思いつけるよう有意義に過ごしてほしいものです。

### ◎法経社会学科 保護者

長男が鹿児島大学にお世話になるようになってから、あっという間に1年が経とうとしています。この間、講義の合間や長期の休みを利用してサークルや有志で県内、県外の各地を巡り見聞を広めているようです。これからも、学内だけでなくもっと外に飛び出して県内外である研修等にも参加しさら

に見聞を広めてほしいと思っています。普段と違う環境で、普段と違う集団と意見を交わしたりフィールドワークを行ったりする中で、大学の講義では得られない貴重な経験ができたり、机上では見落としがちな新たな視点に気付いたりできるのではないのでしょうか。

後援会では学生の国内研修の旅費補助も行っていると思っています。是非、多くの学生にこれらの制度を有効に活用してほしいと思います。

鹿児島大学がこれまで積み上げてこられたノウハウと、学生のやる気があればそれだけでも十分な教育ができるわけですが、そこに経済的な支えが加わればもっと学生たちの背中を押すことができると思います。縁あってこの大学を選んでくれた学生たちです。自分の子どもだけではなく、一人ひとりの学生を保護者全体で支援する、そういう思いを皆さんと共有していけたらと考えています。

地域活性化の中核的拠点としての鹿児島大学で、学生たちが地域とともに社会の発展に貢献する一員として大きく育ってくれることを、保護者として、また、この地域に暮らす者として大いに期待しています。

## 平成 29 年度後援会役員一覧

会長：堂路温幸      副会長：田中孝子  
顧問：高津 孝      常任理事：金丸 哲  
理事〔保護者・社会人学生(本人)〕：  
（経済情報学科）堂路温幸  
（法経社会学科）南 芳浩  
（人文学科）末吉 公子、竹内喜恵  
（人文社会科学研究所）寿 洋一郎  
（臨床心理学研究科）田中孝子

理事〔教員〕：  
（法経社会学科）米田憲市、農中 至  
（人文学科）横山春彦、兼城糸絵  
（臨床心理学研究科）宇都宮敦浩  
監査：野間尚宣、澤田成章  
監事：西 信博

### 問い合わせ先 鹿児島大学法文学部後援会事務局

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30 電話099-285-7510 (7602) FAX 099-285-7609  
E-mail kouenkai@leh.kagoshima-u.ac.jp 後援会ホームページ <http://www.kadai-houbun-kouenkai.jp/>